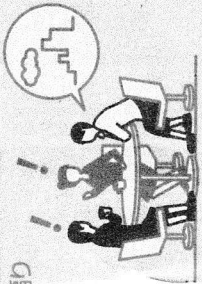


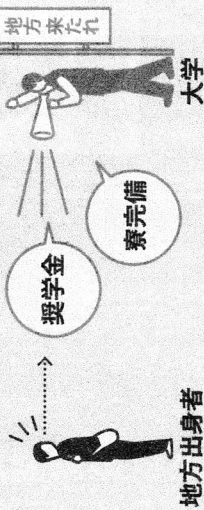
機会が減少



地方出身者

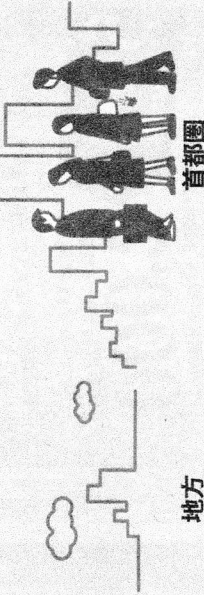
地方の優秀な人材が集まりにくい

少子化で学生減



地方のリーダーを育てられない

広がる地方との距離



グラフィック・下村 佳絵

「挫折」経験できる多様性を

小林雅之・東大教授



こばやし・まさゆき
東京大大学総合教育
研究センター教授。地
域別の大学進学率の連
いなどを研究し、著書
に「大学進学の機会」
など。奨学金制度につ
いても詳しく、国の所
得連動型奨学金制
度の有識者会議で座長
も務めた。

東京の有名大学が首都圏の学生で占められる一因は、首都圏の受験生の多くが、地方の国立大を目指さないことだ。国の統計から分析すると、近年は首都圏の9割以上の学生が首都圏の私大に進む。国立大の授業料が値上げされ続けた影響で、私大も多くの首都圏の受験生にとっては、下宿代も必要になる地方の国立大は、さらに魅力的ではなくなってしまった。

東京の家賃が高止まりする一方、仕送り額は減少傾向で下宿生の経済負担は重くなっている。費用の安い学生寮も少ない。入試の競争率が高く、お金もかかる首都圏への進学を、地方の高校生が敬遠するようになったのは自然な流れだ。

奨学金制度の拡充は有効な対策の一つだが、高校生は進学先を就職とセットで考える。近年は地元志向が強くなり、奨学金だけでは首都圏の有名大にも振り向かないかもしれない。かつて大学は多くが大都市にあり、自然と全国から多様な学生が集まる空間だったが、そうした「全国規模」の大学は減少した。

大学は、学生が異なる文化にショックを受け、価値観を揺さぶられて伸びる場所だ。特に有名大の優秀な学生には、挫折が必要な場合もある。大学に集う学生の多様性の確保は重要だ。(聞き手・岡雄一郎)